



シリーズ 子どもたちの発達

『乳児期に必要な大人との一対一の関係』

子どもは、どの子も生まれながらに「たった一人の、その子ならではの個性」を持っています。そして、その個性が存分に発揮され、どのような能力として出現していくか?!という可能性に満ちた存在です。ですから、子どもの教育の目的において、「その子らしさを生かし、育てる」ことは、その子が本来持っている“能力”を引き出す基本であるということを、私たち大人は常に考えておかなければなりません。

では、子どもが自分の個性を発揮したり、持てる能力を十分に使おうとするのは、どのような時なのでしょう?!

それは、大人にも共通することですが、“自ら何かをしよう!”という主体的な意志や意欲を持って行動する時です。誰かに与えられたりやらされたりするのではなく、子どもが自分の興味や関心から湧き出た好奇心やひらめきを満たし、実現するために考えたり、工夫したり、何とかやり遂げようとする意欲を強く持ったとき、根気良く、繰り返しチャレンジするという能動性が一番発揮されるのです。ですから、その子が自分の力を発揮しながら、より良い発達を遂げていく為には、子どもの中に「自分でやりたい意欲」が満ちていることが大切なのです。

このような、子どもの“自分で!”という気持ちや姿と、成長・発達していく上での学習・教育が一体となって“その子らしさ”は生かされながら、その子自身の能力や才能として、身についたり、花開いたりしていくのです。従って、乳児期に画一的な課題やプログラムを取り組ませたり、“皆と同じ”を子どもに要求する保育や教育では、本来のその子の能力はとても育ちにくいといえます。

なぜなら、特に乳児期においては、子ども一人ひとりの好奇心や好み、何かができるためのその子の様々な機能の成熟や育ちの速度は、一人ひとり違うからです。大切なことは、子どもそれぞれの特徴を十分に把握するように努めながら、生活の中でのあらゆる関わりの中で、

子ども一人ひとりの意欲を引き出し、その子の能動的な行為へと結びつくように、大人が援助できるということです。その子の特徴や長所を伸ばしたり生かしたり、あるいはその子が苦手とすることを克服できるような援助があることで、子どもは失敗を恐れず、生き生きと自分がしたい活動や行為に向かうことができます。そして、大人がそのような“援助が出来る”ようになるためには、まず大人の側が“その子を知る”ことに勤める必要があります。

つまり、その子の個性・特徴を年齢や月齢による一般的な発達段階を踏まえながらも、「この子はどんなことが好きで興味・関心があるのかな?」「体は活発に動かす方かな?わりと静かにしていることが多いかな?」「自分の周囲のことをどのくらい知っているのかな?」「言葉やジェスチャーはどんな風かな?」「嫌い・苦手と感じていることはあるかな?」など、一般的な子どもではなく、“その子自身はどのような子なのか”ということを十分に理解する所から、個々の子どもが尊重され、適切な援助が行われる可能性は広がっていくのです。

このように、その子がどんな子なのかを知らなければ、何をどう助けることができるかの見通しも方針も立ちません。同じ月齢であっても、子どもの発達は全く同じということはありませんし、その子一人ひとりの発達に適した援助をしていく為に、大人がどのような準備をしたり、提供したりする必要があるのかも見えてきます。例えば、ある子は言葉にとっても興味を持っていて、敏感に反応します。そのことをその子が今一番、能力として獲得しようとしていることだと感じたら、大人はわらべうたや言葉遊びをしたり、あらゆる場面、あらゆる機会を大切に“言葉”への興味・関心を満たし、その子なりの発達を実現させてあげられるように試みます。

このように、子ども同士の集団としてのエネルギーや刺激を生かしながらも、子ども一人ひとりに必要な世話や援助は、大人との一対一の関わりの中で十分に行われることが乳児期にはとても大切なことだと考えます。

柏市駅前認証保育園 Kid's Encourage
園長 日下部樹江

